# 陸前高田の桜ライン活動を支援する高萩市民（茨城）

2014/3/9 岩手日報

いわて　東日本大震災

桜の苗木を掘り起こす高萩市の住民。「高田の復興に協力したい」と支援の輪が広がっている＝茨城県高萩市

ともに前へ

震災3年 特別編 6

## 170キロ並木に託す教訓

津波の到達点を桜でつなぎ、震災を後世に伝えよう―。東日本大震災で多くの犠牲者を出した陸前高田市の有志でつくるNPO法人桜ライン311（岡本翔馬代表）。市内の津波到達ライン170キロに約1万7千本の桜を植える壮大なプロジェクトは、国内外の善意に支えられて着実に歩みを進めている。

「高田に桜を咲かせよう」。今月6日、茨城県高萩市に桜ラインの活動に賛同する住民15人がスコップを手に集まった。民家の畑に植えていた桜の苗木60本を次々と掘り起こし、根を保護するための麻袋を丁寧にかぶせていった。

### ■ボールの縁

支援を申し出たのは、高萩市の石川洋一さん(77)。陸前高田市から流れ着いたサッカーボールを海岸で見つけ、寄せ書きを頼りに2011年7月に持ち主に届けたのが縁で、高校の同窓生や桜を所有する高萩さくらの会に協力を呼び掛けた。

苗木はトラックで陸前高田市に運び、津波が到達した場所に植樹される。「高田の復興に役立ててほしい」。高萩さくらの会の大高智衛会長(84)は、優しいまなざしで桜を見送った。

桜ラインプロジェクトは「悔しさ」から始まった風化との闘いだ。沿岸部には1896(明治29)年の明治三陸大津波や、1960（昭和35）年のチリ地震津波の脅威を伝える石碑が数多く残されている。

陸前高田市でも9カ所で石碑や石柱が確認された。「津浪と聞いたら慾捨て逃げろ」「低いところに住家を建てるな」。先人が警告を発していたにもかかわらず、津波への畏怖は年月とともに風化した。

岡本代表(31)は言う。「津波の記憶をどう次の世代に残すか。石では愛せない。桜なら毎年めでたり愛せるはず。自分が死んでも桜が伝えてくれる」。被災者の胸から悔しさが消えることはない。ただ古里のイメージが「高田＝津波」では悲しすぎる。プロジェクトが完結すれば、津波の到達ライン170キロを延々と桜並木が続くことになる。

「高田はすごい桜並木がある所になる。そういう愛される地域になってほしい」

桜の寿命は300年にも達する。未来の世代に豊かな郷土を残したいという思いも活動を後押ししている。

### ■遠いゴール

岡本代表ら陸前高田市の若者10人ほどが11年秋に始めたプロジェクトは、多くの支援で成り立っている。全国からの苗木の提供、運営資金となる寄付は国内はもとより米国、ドイツ、カナダからも届く。植樹を手伝うボランティアは延べ1600人に上った。

それでもゴールは見えない。桜を植える場所を整え苗木を用意し、それを2年間維持するのに1本当たり1万6500円掛かる。これまでに植えた桜は647本（昨年12月1日現在）。1万7千本を植えるには、少なくとも3億円かかる計算だ。

いつ終わるともしれない地道な取り組みが続く。それでも、活動を通して交流の輪は広がる。高萩市で石川さんは作業を終えた仲間に呼び掛けた。「桜が咲くころに高田に行こう。見事に咲いた桜を見るのが楽しみだ」

（東京支社・宮川哲）

## 苗木は未来への寄贈

感謝メッセージ

NPO法人桜ライン311代表
岡本翔馬さん(31)

このプロジェクトがここまで広がるとは思わなかった。夢のようだ。1万7千本は途方もない数字。ホームページ(HP)を作ったり全国から陸前高田市に来た人に訴えたりいろいろしたが、本当にありがたい。多くの人に支えられて少しずつ前を向けるようになってきた。桜の苗木の提供は、高田の未来に寄贈してくれていると思う。僕らの中から悔しさが消えることはないが、それだけじゃいけない。一緒にやろうと言ってくれる人たちがいる。

ボランティアや寄付の詳細はHP(http://sakura-line311.org)へ。